

「それぞれの動機」を尊重する 面倒でハードな道のりが 新たな価値を創り出す



共創で
できる
関係



慣れ親しんだチームや業界から飛び出し、外の人たちと協働する——高校現場に限らず、大学や企業でも、組織外の人とのコラボレーションの機会が増えています。よく使う言葉も文化も価値観も、時間感覚すらも違う人たちが、一つのプロジェクトに取り組む。このとき陥りがちなのが、目指したい成果や取り組む内容について話したところで、すぐに「では私はこれをします」「こちらはこんな協力ができます」と、互いのリソースの交換に入ってしまうこと。すると、ゴールは確認したはずなのに、なぜか話が噛み合わなかったり、すれ違いが生じたりします。活動のゴールとは別に、参加者はそれぞれ異なる動機や期待をもって、その場に集っているからです。

学校の外の人たちが、学校や教育に携わることの動機は、実に多様です。社会貢献。自身のキャリアアップや経験のため。若い世代の率直

安齋勇樹
MMIGUR代表取締役COO
東京大学大学院 客員研究員

な声が聞きたいという人も。さらに個人の動機とは別に、所属する組織のねらいもあるかもしれません。人が何かに取り組む動機はさまざまです。その多様な動機を理解し、尊重し、それぞれの目的を達成できるように助け合いながらも、みんなで一つの成果を目指す。この、面倒でハードな道のりこそが、「共創」に必要なプロセスだと、私は考えています。

例えば尾田栄一郎さんの漫画『ONE PIECE』に登場する、麦わらの一味の旅が、まさにそうです。それぞれがバラバラな夢とバラバラな能力をもち、それぞれの夢を叶えるために一つの船に乗っている。彼らは「次にどの島を目指すか」については合意形成をしますが、「旅する目的をすり合わせて統一しよう」なんてことはしません。異なる動機を理解し、尊重し、助け合うことが、何が起きるかわからない航海を乗り越える力になっているのです。

だから私は、活動に関わる人たちに「なぜ、この取り組みをするか」、組織として、また個人としての動機や期待を聞くようにしています。もちろん、自分の意志ではなく参加している人もいるでしょう。そんなときは「どうせやるなら」こういう機会にしたい、と思うことはありますか?」「この場を通じて“個人的にやってみたいこと”はありますか?」とハードルを下げて聞いてみると、率直な想いが聞けることがあります。何も、立派な動機でなくていいのです。それぞれの「らしさ」を大切に、共に何かを創り出していく。日頃は教室運営を一手に担っておられる先生方ですが、時には、その“お一人で率いる”モードから少し離れて、肩の力を抜きながら、助け合い、共に創り出す関係を楽しんでいただけたらと思います。

共創でできる関係



安斎勇樹

 WINGU代表取締役Co.CEO
 東京大学大学院 客員研究員

Profile

あんざい・ゆうき●1985年生まれ。東京都出身。東京大学工学部卒業、東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。博士(学際情報学)。企業経営と研究活動を往復しながら、人の創造性を活かした新しい組織・キャリア論について探究している。主な著書に『問いのデザイン』『問いかけの作法』などがある。

冒険する組織のつくりかた「軍事的世界観」を抜け出す5つの思考法
 (発行: テオリア、発売: ディスカヴァー・トゥエンティワン)



取材・文／塚田智恵美 撮影／三井 実



「社会に開かれた教育課程」という理念を掲げた学習指導要領が2022年度にスタートしてから、3年以上が経ちました。これからの社会を生きる子どもたちには、学校で得た学びを実社会と結びつけ、将来にわたって生かしていく力が求められています。学校がその力を育成していくためには、学校という枠を越えて、地域社会や企業、大学など、幅広いフィールドで学校外の人々と連携・協働していくことが必要だと言われています。

実際に、全国各地の高校では、学校運営に地域住民などが参画するコミュニティ・スクールの導入が年々増加し、令和6年度には約37%に達するなど、学校と社会が一体となって子どもたちを育てる意識が高まっています。

しかし実践が進む一方で、学校外との連携に難しさを感じている先生方も多いと思います。誰に声をかければいいのか、どんな活動をすれば効果があるのか、単発で終わらずに続けるにはどうしたらいいのか。こうした声は、多くの先生方が抱えている課題ではないでしょうか。

学校と社会が共に学びを創り、未来を担う高校生を育んでいくためには、両者がそれぞれの「想い」をすり合わせ、対等な立場で協働していくことが重要です。本特集では、そんな「社会と協働した学び」の実践をご紹介します。どのようにして関係性を築き、活動を持続させているのか。関係者の「想い」に光を当てながら、その工夫や試行錯誤の過程を取材しました。

「どうすれば一步を踏み出せるのか」「どうすれば協働へと発展させられるのか」。連携のその先にある「協働」へ。先生方が一步を踏み出す一助となれば幸いです。

社会と共に創る 学びの現在地

地域と未来を創る 高校の実践事例

「地域とのつながりが広がらない」「外部連携が単発のイベントで終わる」「行政との連携が希薄」…
協働相手と関係を構築する際にありがちな困難を乗り越え、
地域と共に歩む3つの事例を紹介します。

CASE

1

ふ え ふ き
笛吹高校（山梨・県立）

コミュニティ・スクール導入で動き出した
地域と“点”ではなく“面”でつながる学校づくり

CASE

2

大阪ビジネスフロンティア高校（大阪・府立）

大学との接続教育、企業・地域との関係性の構築で、
イベントで終わらない持続型の外部連携を実現

CASE

3

さ よ う
佐用高校（兵庫・県立）

行政と目線を合わせた「地域協働プロジェクト」で
地域への愛着心を育む

ふ え ふ き 笛吹高校（山梨・県立）

コミュニティ・スクール導入で動き出した 地域と“点”ではなく“面”でつながる学校づくり



校長
廣瀬志保先生



教務主任
青野孝文先生

一緒に学校の課題解決を図る “応援団”として組織化

笛吹高校は2023年度、地域探究に取り組む新教科「笛吹グローバル」の立ち上げとともに、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度、以下CS）を導入した。前任校でCS運営経験があり、現在文部科学省からCSマイスターを委嘱されている校長の廣瀬志保先生はこう話す。

「本校は笛吹市内唯一の高校として、生徒が地域の美化活動や収穫祭への協力などを行ってきました。しかし、それはあくまで“点”でした。本校はスクール・ミッションに、『主体的に学ぶ力を育て、地域に根ざし、地域に貢献し、地域のリーダーとなる人材を育成すること』を掲げています。その実現には、学校と地域が“面”でつながり合うことが非常に重要です。CS導入を契機とし、本校の“応援団”を増やしていきたいと考えました」

CS発足にあたり、最も重要視したのは委員の人選だ。所属や役職だけを見るのではなく、「本校の課題を一緒に解決してくださる方」に

依頼したという（図1）。

「例えば、いじめ防止に力を入れるために心理学の専門家、学校評価の改善のためにデータサイエンスの専門家に入っていました。また、市役所には、生徒の多様な探究活動の支援先につながるよう、統括的な部署に協力を頂いています」（廣瀬先生）

学校運営協議会は年4回開催し、生徒との懇談や授業視察なども行う。年度末には学校側と地域側の双方から意見を持ち寄り、新年度の重点課題を設定する。例えば今年度は「地域コーディネーターの役割の明確化」「教員の働き

図1

笛吹高校 学校運営協議会委員 (2025年度)

地域代表／PTA会長／同窓会長／笛吹高校 校長／
笛吹高校 教務主任／山梨大学大学院 教授／
山梨学院短期大学 教授／笛吹市教育長／
笛吹市総合政策部 部長／
笛吹農業協同組合指導部 部長／
山梨県建設業協会業務部 部長／防災ブレイメン代表／
石和温泉旅館協同組合 副理事長／
笛吹市立石和中学校 校長／
笛吹市立石和南小学校 校長

方改革への対応」「少子化に伴う生徒募集について」に取り組んでいるところだ。CS導入2年目以降は4つの部会を設置(今年度は「地域連携」「評価検証」「魅力化発信」「生徒育成」)、部会ごとに教員と連携し、生徒の声も直接聞きながら活動している。

CSが起点となって 地域とのつながりが複層的に

この2年余り、CSがきっかけで実現したことは数多い。例えば、同校生徒が中学生の探究活動にアドバイスを行う中高連携の取組、市と同校の包括連携協定に対するクラウドファンディングの実施、生徒と地域住民のための学校前の道路の安全対策強化など、さまざま。

「CS委員の皆さんから教員にはない視点のご意見を頂き、はっとさせられたり、挑戦に向けて力強く背中を押していただいたりしています」(廣瀬先生)

また、「笛吹グローバル」の実践においては、CS委員全員がそれぞれの人脈を活かし、学校外

地域の声

共に地域を良くしていきたい

先生方とは違う立場で専門性をもつ大人として、生徒たちに何かを伝えられたらと考えています。「笛吹グローバル」のワークショップでは、生徒たちと意見交換するなかでプロジェクトが立ち上がり、生徒たちの試行錯誤を1年間応援することに。最後に実現した手作りマルシェでは、それまでにない充実した表情の生徒たちを見て、感銘を受けたものです。地域には課題が山積み、その解決は簡単ではありませんが、生徒たちに「地域を良くしたい」という思いが芽生えることは非常に大切な一歩であり、心から嬉しく思います。今後、地域でその思いが循環していくように、自分にできることを全力で行っていききたいと思います。



山本憲一さん

笛吹高等学校運営協議会 会長
(一般社団法人山梨県建設業協会 業務部 部長)

の関係者との橋渡しを行う。加えて、CS導入の一環で配置した地域学校協働活動推進員や協働活動リーダーも、地域連携をきめ細かく支援している。CS委員は、時には自らが講師となり、地域課題の現状を伝える。そのなかで「一緒にやってみようよ」とプロジェクトが立ち上がった例もある。

／ 笛吹高校の取組のポイント ／

コミュニティ・スクールを活用し地域との つながりを広げ、持続させるには？

- コミュニティ・スクールを起点に生徒の地域との接点を増やし、双方向のものにする。
- コミュニティ・スクールを活用し、地域の視点を取り入れた学校の改善や、探究活動における地域との橋渡しなどを推進。
- 学校と地域がWin-Winとなることを意識する。
- 生徒の地域探究をはじめとする学校のトピックを、新聞やWebサイトで日々発信する。

「地域を元気にしたいという思いは共通です。CS委員の皆さんが元々もつ地域愛が、生徒に接するなかで一層強まっているように感じます」
(廣瀬先生)

Win-Winを目指し 地域との継続的な関係性へ

地域との関わりのなかで、生徒たちは大きく成長している。中高連携の取組では、生徒は自らの探究経験を基に中学生に的確なアドバイスをを行った。また、3年生の探究発表は、2年前からは想像できない堂々としたもので教員を驚かせた。学校評価のアンケート結果では、地域連携の効果に関する項目が大きく上昇している。

「本校には内向的な生徒も多く、探究活動では最初から積極的に行動する生徒は少数派です。しかし、地域と関わるなかで、課題が自分ごととなり、自分にもできることがあるという自信と参画力を高めています」(廣瀬先生)

CSの支えで日常的な地域での探究活動が

実現。その様子を新聞やWebサイトを活用して発信すると、地域からさまざまな反響がある。CSを介して今後の活動へのリクエストをもらうことも多い。その積み重ねにより、地域との継続的な関係性が構築されてきた。

「地域と学校の双方にWin-Winでないと、関係性は長続きしません。地域側にも新しい発想を得るなどのプラス面があるから、次も一緒にやろうという循環になるのでしょう」(廣瀬先生)

地域との関わりが増えたことは、教職員の意識変化にもつながった。

「今、生徒が学校外でいきいきと活動する姿を見て、『学校を社会に開くとはこういうことか』と。周辺地域がどんな状況で、本校に何を期待しているか、意外と見えていませんでした。まず我々教員が、学校外にも目を向けることが大切だと実感しています」(教務主任・青野孝文先生)

同校は今後もCSを起点として、地域との関係性を広げていく方針だ。

「学校や教育活動に完成形はありません。社会変化に合わせて、学校も教員も試行錯誤しながら変わり続けなくてはならない。そのなかでCSは非常に心強い存在です」(青野先生)

「学校魅力化の一層の推進など、本校が取り組む課題はまだたくさんあります。それらを校内だけで考えるのではなく、幅広い皆さんと意見交換しながら、共に取り組んでいけたら嬉しいです」(廣瀬先生)



ある日の学校運営協議会。生徒も参加し、委員からの質問に答え、自身の意見を述べた。

学校データ

2010年創立／普通科・食品化学科・果樹園芸科・総合学科／生徒数645人(男子373人・女子272人)／
2023年度から文部科学省指定研究開発学校。

大阪ビジネスフロンティア高校（大阪・府立）

大学との接続教育、企業・地域との関係性の構築で、
イベントで終わらない持続型の外部連携を実現



校長
堀内 泉先生



教頭
駒居 智志先生



指導教諭・進路指導主事
鈴木 康史先生

大学と連携し、7年間で生徒を 育てる高大接続教育を実践

グローバルビジネス科を設置する専門高校である大阪ビジネスフロンティア高校では、開校当初から大学や企業、地域との連携を前提にした教育課程を策定・実践してきた。その根底には、「高校3年間＋大学4年間＝7年間」で生徒を育てる高大接続型の教育を目指すという同校の理念がある。開校準備から携わり、現在は同校の校長を務める堀内 泉先生は、次のように話す。

「高校で簿記などの商業の専門科目を学んだ生徒が大学の商学部などに進学すると、大学でまた同様の科目を履修しなければならないという課題がありました。私たち高校側の課題と、“尖った”学生に入学してもらい、専門性を伸ばしたいという大学側の思いが合致し、いわゆる高大連携にとどまらない真の意味での高大接続を実現しようということになりました」

開校当初は、大阪市立大学（現・大阪公立

大学）・商学部、関西大学・商学部、関西外国語大学・国際言語学部（現・英語国際学部）と提携し、7年間を見通した独自の高大接続プログラムを策定。その後、京都産業大学・経営学部、桃山学院大学・経営学部が加わり、現在は5つの大学との連携が進んでいる。

高校では「高大接続科目」として、1年次は「ビジネス基礎」、2年次は「ビジネス・マネジメント」、3年次は「グローバル経済」を開講。経営リテラシーなど専門基礎を実践的に学び、2年次には関西大学の学生と一緒にビジネスプランを考案する「ゼミ交流」なども行う。高大接続科目は各学年3単位（必修）で、3年次の「課題研究」も含めて3年間で12単位を大学での学びに通じる探究的な学習・活動に充てているのも特徴だ。

連携大学との間には特別入学制度があり、毎年65名ほどが制度を利用して進学。大学進学後は、高校で習得した専門性をさらに伸ばす特別プログラムを受講する。プログラムの内容は大学により異なり、例えば関西大学・商学部では、会計専門職大学院や公認会計士を目指

す「会計連携特別プログラム (ALSP)」や、英語に強いプロアクティブなビジネスリーダーを目指す「ビジネスリーダー特別プログラム (BLS P)」を受講。一般的な学生よりも早期から専門性を磨いていく。

「特別入学制度で進学した学生は概して大学での学業成績が良く、なかには首席で大学を卒業した学生もいます。7年間の継続的な学びを通して社会人基礎力を身につけ、専門性を磨き、即戦力となる。そんな私たちが目指す高大接続教育は、一定の効果を上げていると考えています」(堀内先生)



SHIBUYA109阿倍野店の企画で、生徒がパンメーカーと共同開発した「塩昆ぶわっサン」。女子高生の間で流行っている塩昆布とクロワッサンの掛け合わせは生徒が考案し、店頭で試食販売も行った。



連携目的ではない関係性がカギ。 みんなの「楽しい」が原動力に

同校では、地域や企業との連携も進んでいる。再編・統合前の3つの商業高校がそれぞれもっていた地域や企業とのつながりをきっかけに、現在では地元のパン屋、弁当屋、カフェ、商店街、公認会計士、近隣の小中一貫校などと広く連携。生徒が考案した商品を製造・販売したり、商店街を盛り上げるイベントを生徒主体で開催したりと、「外部の人たちと一緒にやる」「リアルなビジネスに触れる」を授業や部活動、有志活動などさまざまなシーンで実践してきた。商品開発などの取組がやりたくて入学してきた生徒も多く、生徒たちも積極的だ。

例えば、高大接続科目である1年次の「ビジネス基礎」では、地元の弁当屋とコラボ。公認会計士の助言を受けつつ、コストや売上、損益・収支などを考えながら商品を企画・販売している。また、昨年度の3年次の「グローバル経済」では、カフェとコラボしてマフィンを製造・販売。薄利多売、高級志向などクラスごとに商品のコンセプトや販売戦略を練り、売上を競い合った。

大阪ビジネスフロンティア高校の取組のポイント

外部連携を単発のイベントで 終わらせないためには？

- 「高校3年間+大学4年間=7年間」の「学びの接続」を意図した長期的な授業設計を行う。
- 地域や企業とは、連携ありきではなく関係性を構築したうえで「楽しさ」を共有する。
- 教員の負担を削減し、属人化させずに継続するために業務のパッケージ化に取り組む。



義務教育学校・生野未来学園の7年生と大阪ビジネスフロンティア高校の生徒たちが、生野本通中央商店街で開催する「いくの未来お店バトル」。地元の金融機関の支援を受け、全国の名産品を仕入れて販売する。

外部連携のきっかけはさまざまで、「生徒が地域の事業者と話聞きに行ったり、現場を見せてもらったりするなかで距離が近くなり、結果的に何か一緒にやりましようとなるケースがほとんど」と教頭の駒居智志先生。「連携ありきではなく関係性ができたうえでの取組なので、外部の方々にとっても私たちにとってもやらされ感はない」と言う。今では地域や企業から連携の話が絶えず、特に今年度は大阪・関西万博関係の取組が多く、手に負いきれないほどだ。

「連携先の方になぜここまで協力的なのかと尋ねると、『高校生と一緒にやるのが楽しいから』とおっしゃるんです。『生徒の笑顔がいいんだ』と。かかる時間、お金、労力といった損得ではないんですよ。それは生徒も同じで、アルバイトとは違ってお金が稼げるわけではなくても、楽しいからやると。みんなイキイキしていますし、学校とは違う一面を見せる生徒もいて、学びの場は学校だけじゃない、教科書では学べないことがあるということを身をもって感じています」(堀内先生)

教員の負担軽減のため、 業務のパッケージ化を進める

一方、課題となっているのが教員の負担だ。

同校では「英語・簿記会計・ICT」を柱に高度な専門教育に取り組み、教科指導の負担は小さくない。加えての外部連携であり、教員の負担軽減は長年の課題となってきた。「やりたいからやっている先生、取組にやりがいを感じている先生も多い。だからこそ、つい業務過多になってしまう」と話すのは、指導教諭・進路指導主事の鈴木康史先生。連携先との打合わせは授業後の時間が中心で、各種調整のためのメールや電話のやり取りや事前準備にも時間がかかる。また、担当者間の業務の引き継ぎにも課題があった。そこで現在取り組んでいるのが、外部連携に関する業務のパッケージ化だ。具体的には、資料や教材の共通化やノウハウの文書化、マニュアルの作成などを進めている。

「教員には存分に個性を発揮してほしいので、その余地を残しつつ、共有できる部分は共有することで負担軽減を目指しています。パッケージ化により余裕が生まれれば、新しい挑戦もできるでしょう。今後は、これまで商業系学部が中心だった大学の接続先を他分野にも拡張したいと考えています。また、商業高校をルーツにもつ本校の強みである探究活動に普通科が追いついてきたので、ビジネスコンテストなどでも負けないよう、外部連携も含めて再度テコ入れをしていきたいと考えています。不易流行をモットーに、変えてはいけな軸をもちつつ、変わり続ける学校でありたいですね」(堀内先生)

学校データ

2012年創立／グローバルビジネス科／生徒数710人(男子264人・女子446人)／3つの商業高校を再編・統合して開校し、「英語・簿記会計・ICT」を柱とした専門教育を行っている

佐用高校（兵庫・県立）

行政と目線を合わせた「地域協働プロジェクト」で 地域への愛着心を育む



家政科長
前野恵美先生



佐用町企画防災課
まちづくり企画室長
谷本美沙さん

地域と高校のニーズが合致し、 地域協働プロジェクトが始動

佐用高校家政科は、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、2020年度から3年間、「地域協働プロジェクト」として地域と連携した教育活動に取り組んできた。きっかけは、当時の校長と家政科長が、町の役場に協力を持ち掛けたことだった。当時を知る、佐用町企画防災課まちづくり企画室長の谷本美沙さんは、次のように振り返る。

「佐用町では人口減少が進み、子どもの数も減っています。特に、住民の重要なライフラインであり、佐用高生の多くが通学に利用しているJR姫新線の利用者数が伸び悩んでいるのが課題です。鉄道がなくなれば高校に通えなくなり、高校がなくなれば鉄道は成り立たなくなり、町から人が出ていってしまうでしょう。地域を存続させるうえで佐用高校や若い高校生の存在はとても重要であり、高校3年間を過ごすなかで佐用に愛着をもってもらうためにも、役場としても高校との連

携は不可欠だと考えていました。つながりを求めているところに学校からお話をいただき、ぜひ一緒にやろうということになりました」(谷本さん)

地域の課題や求める人物像から、家政科では「佐用の特産品を活用する」「佐用で暮らす人を守る」「佐用の水害から学ぶ」を3本柱としてカリキュラムを作成。地元の食材を使ったオリジナル商品の開発・販売、生徒による高齢者の居宅訪問、地域と協働した防災訓練や非常食の開発などに生徒主体で取り組み、3年間をかけて外部とのつながりや連携体制も整えた。しかし、事業の指定は2022年度で終了。プロジェクト継続のための資金確保を検討するなか、佐用町から支援の申し出があり、「輝く人づくり支援事業」の一環として3か年計画で佐用高校の教育活動（普通科・農業科学科含む）に予算がつくことになった。

「最初の3年間の取組を通して高校生と地域住民との間につながりが生まれ、特に高齢者は高校生との交流を楽しみにしていました。そうした活動を資金がないからという理由でやめるの

は地域のためにもならない、ぜひ継続しようと、予算をあてることになりました」(谷本さん)

自分たちの学びや実践を、 社会がどう受け止めるかを知る

こうして活動資金を確保でき、地域協働プロジェクトは現在も継続中だ。「予算がつくことで活動に制約が出てしまうと本末転倒。学校を応援したいという思いからあてた予算なので、使い道については学校に任せている」と谷本さんは言う。

2025年度から家政科長に就いた前野恵美先生は、外部と連携した取組を引き継ぎつつ、試行錯誤しながら新しいことにも挑戦している。「生徒が地域に出ていくのは、移動手段や時間の確保において、また、高齢者施設や居宅への訪問は、感染症対策や個人情報保護の観点から配慮が必要なことが多く、ハードルが高い」と前野先生。前任校でも同様の課題があったが、「地域の人に高校に来てもらう」という発想の転換で乗り越えたという。

商品開発の授業では、調理専門学校の講師に教わりながら、佐用町の特産品「佐用もち大豆」を使った防災食を試作。ローリングストックを意識した防災食で、大豆に加えて野菜も摂取できるよう、また、災害などの緊急時でもストレスなく食べられるよう、具材や味付けを工夫した。



「前任校では、保育園に通う子どもたちと一緒に、生徒が企画したおもちゃを作る、という活動がありました。生徒が保育園を訪れていたときは年1回しか実施できなかったのですが、園の送迎バスを使って園児たちに高校に来てもらうようにしたところ、年4回実施できるようになりました。佐用高校でも、地域の高齢者に学校に来てもらうなど、応用ができるのではないかと考えています。軸となる部分は引き継ぎつつ、よりよくできる部分は工夫したいと思っています」(前野先生)

一方、生徒が地域に出て活動する機会、社会を知る機会をつくり、地域と協働することも、意識している。

「これまでは商品の開発が中心で販売はイベント的でしたが、今年度からは買い手とふれあう機

＼ 佐用高校の取組のポイント ／

行政と密に連携するには？

- 高校のニーズと地域のニーズをすり合わせ、「高校の教育活動の充実化」と「地域の活性化」という共に目指す地域協働の目標を設定する。
- 高校と地域とのつながりを深め、互いにメリットを享受できる体制を整えることで、行政が予算化するなど活動を支える財政基盤と支援体制を確保する。
- 高校と地域との橋渡し役を務める地域協働アドバイザーを配置することで、高校側からの依頼や相談を受け、案件に応じて役場や地域の人とつなぐ体制を構築する。



「高校生訪問サービス」では、地域の高齢者の居宅を複数回訪問し、関係を深めている。調整のハードルが高いのが課題だが、楽しみにしている高齢者も多いという。

会を増やそうとしています。作って売って満足ではなく、大事なのは、自分たちが得た知識・技能がどう役立つか、自分たちが生み出したものが社会にどのように受け止められるか、を知ることです。地域の方々と直接コミュニケーションをとるなかで、商品や接客がどのように受け止められるか、ネガティブな反応も含めてリアルに経験することが、家庭科という教科の学びにおいても重要だと考えています」(前野先生)

関わる大人がもつべきは、 危機感ではなくワクワク感

現在は、高校と地域との橋渡し役を務める役場の担当者が、高校側からの依頼や相談を受け、福祉、農業、産業など案件に応じて担当部署や地域の人とつなぐ体制ができている。「役場と学校との目線合わせを大事にしている」と谷本さんが言うように、年に数回は役場と高校が集まり意見を交わし合うほか、町長等も折に

触れて高校に足を運ぶ。「科長として赴任した直後は戸惑いもあった」という前野先生も、「今はとてもワクワクしている」と笑顔を見せる。

「前任の先生が家政科全体で取組を共有してくれていたこと、そして、谷本さんをはじめ役場の方々と学校・学科として関係性ができていたことは、ありがたかったですね。人口減少や少子化といった地域の現状や課題を理解することは大事ですが、もつべきは現状に対する危機感や未来への不安ではなく、佐用をより良くするために新しいことに挑戦したいという前向きな気持ち。ワクワクしながら取り組むことが大事なんじゃないかなと思います。今後は、普通科、農業科学科、家政科という3学科がある高校として地域にいかに関元できるか、他学科とも協力しながら3科協働に取り組んでいきたいです」(前野先生)

谷本さんも、「高校生のアイデアの実現をサポートできる体制を整えたい」と意欲を見せる。

「高校生にとって、自分のアイデアと行動力で地域を少しでも変えたという経験は、とても大事なんじゃないかと思うんです。将来の活躍の場が佐用であろうとなかろうと、高校生に地域に愛着や誇りをもってほしい。そう思うなら私たち地域の大人も、この町で輝く姿を見せるべきだし、この町の豊かさや魅力を感じてもらえるような発言・発信をすべきです。今後も高校や先生方と協力して、地域や高校の魅力を向上させる取組を実践していきたいです」(谷本さん)

学校データ

1906年創立／普通科・農業科学科・家政科／生徒数352人(男子193人・女子159人)／兵庫県佐用郡内唯一の高校。かつては佐用町内のほとんどの中学生が同校に進学していたが、現在の進学率は3～4割。周辺市町村から通う生徒も多い。

協働の 輪を広げる、 働きかけ方

地域の人々と協働で何かを始めるとき、
企業や団体はどのようなことを
心掛けているのでしょうか。

学校が外部と協働するうえでのヒントを探るため、
長野県松本市の銭湯と
沖縄県大宜味村の観光協会で働くお二人に
具体策やマインドについて伺いました。

CASE

1



菊の湯
(長野県松本市)

CASE

2



おおぎみそん
大宜味村観光協会
(沖縄県大宜味村)



CASE 1

菊の湯（長野県松本市）

北アルプスの玄関口、松本駅から続く大通り沿いに建つ銭湯「菊の湯」は、
山から流れる地下水を沸かすなど、「街と森を結ぶ湯屋」がコンセプト。

地域の人々が集うコミュニティハブの機能も果たしています。

湯屋チーフの鮎沢日菜子さんに、協働の価値と関わり方について伺いました。

菊の湯は100年近くの歴史をもつ老舗の銭湯だが、時代の波に抗えず、数年前に一度閉業しかけている。しかし、「銭湯がある街の風景を残したい」と、向かいの書店兼喫茶店「栞日」のオーナーが事業を引き継ぎ、

クラウドファンディングで集まった資金を元に改装。2020年に再オープンを果たした。

その際、掲げた約束の一つが、菊の湯を慕い、通っていたご近所さんにとって、変わらず心地よい場であり続けること。そのうえで、

若者を含めたあらゆる世代が湯を共有し、コミュニケーションが交わされる社交場としての姿を取り戻すことだ。そのため新生菊の湯では、地域の人々との協働によって二階の休憩室を舞台に、整体マッサージやワークショップ、演奏会や上映会などが頻繁に開催されている。

こうしたイベントの企画のほか、日々の湯沸かしや掃除、番台業務を担当するのが、三代目湯屋チーフの鮎沢日菜子さんだ。愛知県の大学で学び、社会福祉士として働いていたが、コロナ禍で地元でUターン。リニューアルの1年後に、スタッフの仲間入りをした。

「大学時代からいくつかのNPOに携わり、地域の人が集まる場所で働きたいと思っていました。なかでも、一人暮らしをしていた祖母から『風呂友がいるのよ』という話を聞き、そうした豊かな人間関係が築ける場があるの

なら、続けてほしいという思いがありました」

学生スタッフの「やりたい」から 始まった「菊の湯てらこや」

湯上りに楽しめるイベントを多くデザインしてはいるが、必ずしも湯上りである必要はないと鮎沢さん。

「銭湯に来る習慣がない方も大勢いるわけで、足を運ぶきっかけにしてほしいんです。そのうえで『こんな楽しい場所なら、次はお湯に浸かりたい』という気分になっていただければ嬉しいです」

そんなことから始まったイベントの一つが、「菊の湯てらこや」だ。月に2回、週末の菊の湯に小学生が集まり、大学生と一緒に遊んだり、宿題をしたり、お風呂に入ったり。2022年当時、教育学部で学んでいた学生ス



この方に聞きました

菊の湯 三代目湯屋チーフ
鮎沢日菜子さん

あいざわ・ひなこ ● 1994年長野県生まれ。総合学科高校で福祉の世界を知り、愛知県の日本福祉大学に進学。在学中、福島の子どもの支援などボランティア活動を積極的に行う。卒業後、福祉系のNPOに勤務したのち長野県にUターン。書店兼喫茶店「葉日」や、銭湯「菊の湯」を経営する株式会社葉日に転職。湯屋チーフとして、湯沸かし、掃除、番台業務のほかマネジメント業務にも携わる。

タッフの、そんな居場所があればいいのに、というつぶやきに反応した鮎沢さんが、「いいじゃん、みんなを巻き込んでやろうよ」と背中を押したことで始まった。

「私自身がリーダーシップを発揮するというよりは、スタッフや地域の人との会話のなかで、『こんなこと、できたらいいな』といった声を拾い、いいねと後押しし、どうしたら実現できるか考えることが好きなタイプなんです」

開始から数年。課題は、発案者の学生スタッフが大学卒業後、誰が中心となって継続するかだった。

「他の学生スタッフに声を掛けたものの、手伝いはするけど中心でやるのは…、という感じ。やりたい気持ちがあって初めて活動は続くものなので、どうしたものかと発案者の学生と話し合ったところ、ゼミの先生の協力で、教

育学部の後輩が引き継いでくれることになったんです。菊の湯のバイトでもないのに、わざわざボランティアで来てくれて大変ありがたいです。将来的には、今、てらこやに来ている小学生たちが大学生になったとき、手伝ってくれるような循環が生まれると素敵かなって」

「おやこ菊の湯」という人気の企画もある。小さい子を抱える親御さんが、のんびり湯船に浸かれるよう、男女それぞれの脱衣所に、お子さんの着替えや入浴を見守るボランティアを配した定例イベントだ。

「親子という新たな客層に来てもらう目的もありますが、ご近所との繋がりが希薄で、子育てが“孤育て”になりがちな育児状況もあるなか、社会福祉士である私の課題解決の一方策にもなっています。そんな思いが伝わるのか、あるお母さんから、『私も、こうした子

SUMMARY

協働の 目的

あらゆる世代が湯や場を共有し、コミュニケーションが交わされる社交場としての姿を取り戻す。100年続く銭湯を、単なるお風呂に入る場所ではなく、街との接点を意識した人・モノ・コトが交差する場に。

協働する 相手

地域の人々。常連客だけではなく、観光客や若者、親子など新たなユーザー層。企業や団体など数多くのコラボレーション先。

働きかけ方 の工夫

まずは、やりたいと思ったことを周囲に話してみる。直接協力を得られなくても、適任者を紹介されたり、アドバイスをもらえたりすることも。また、依頼する側・される側という固定化した役割ではなく、いつでも立場が入れ替わられるよう意識することで、関係性が持続的、発展的になる。

育てに優しい場所をつくりたいと思っていました。今は育児で忙しく、一緒にやることは難しいけど、落ちついたら何か活動したい』と言われたことも。信念をもって続けていれば、賛同者が現れるんだなって、力を頂きました

地元の高校生や教員の「やってみたい」も応援する

こうした活動によって、「菊の湯=銭湯」という認識から、次第に「お風呂もある、面白いことができる場所」と認知されはじめ、外部からもさまざまな企画が持ち込まれるようになった。

「銭湯好きの高校生から、探究の授業の一環で、石鹸づくりのワークショップができないか相談されたこともあります。同級生の多くが銭湯体験がないことを知って驚き、銭湯の魅力を伝えたいというのです。知り合いの大人を講師に、宝石のようにキラキラした石鹸をみんなで作り、その後銭湯の見学ツアーを行うというユニークな内容で、企画から告知までその生徒が中心になって行い、二度開催しました」

まさに、高校生の「やってみたい」を後押しした形だが、何でもかんでも引き受けるわ

けにはいかない。どういうケースであれば断っていたらどうか。

「『課題なので仕方なく』という様子が垣間見えたら、『自分の気持ちをよく考えてから、もう一度来て』と言っていたかもしれません。

ただ、私も学生時代、周囲の大人に応援してもらっていたわけで、時間が許す限り、教育や子育てをサポートしたいと思っています」

教員が、こんな依頼に来たこともある。

「最近も県内ニュースで取り上げられていましたが、長野県では、学校の先生が地域の企業で数日間、職場体験をする研修制度があるそうなんです。受け入れ先は自ら開拓する必要があり、一昨年、菊の湯と栞日に、研修を依頼しにきた工業高校の先生がいらっしゃいました。生徒の就職に関係ありそうな工場などではなく、自分が知らない職場を体験したかったそうです。私にとっても、学校の先生はどんな職業なのか興味があり、2日間一緒に働くなか、やりがいや悩みなどの本音が聞けて楽しかったです」

まずは周囲に話してみる そこから始まる新たな可能性

地域のさまざまな人々と協働の輪を広げて

手伝ってもらう側が今度は手伝う側に。
そんな関係がコミュニティを豊かにする

いる鮎沢さんに、働きかけ方のヒントを聞いてみた。

「やりたいことがあるなら、漠然としていても、まずは周囲に話してみることではないでしょうか。最初から協力を依頼するのではなく、『こんなことを考えているけど、どう思いますか』くらいの聞き方にとどめ、①『面白そうだね』と言われれば『一緒にやりませんか』と誘いやすいし、②『自分は興味ないかな』と言われたら『興味ありそうな方がいたら繋いでもらえませんか』と頼めばいいし、③『それってうまくいくの』という顔をされたら、問題点はどこかを教えてもらうこともできると思います。

あと、経験上、『主催者と参加者』『助ける人と助けられる人』など立場が固定化した関係性に違和感をもっていました。おやこ菊の湯のエピソードのように、今は『手伝ってもらう側』だけど、次は『手伝う側』にも回れるような関係を意識的につくることで、コミュニティは発展するし、持続可能になると思うんです。例えば菊の湯には時々、『定期演奏会の協賛をお願いします』などと高校生や大学生がスポンサーを募りにきます。そんなときは、『どんな思いで実施するの？ 誰に来てほしいの？』と聞くとともに、菊の湯のパンフレットを渡して、『こんなイベントを企画しているから部



老若男女がくつろげる畳敷きの広々とした二階休憩室。左の棚は、登山用リュックも入る大型のロッカー。リノベーションには信州大学の学生も関わった。

活のみんなで来てね』と付け加えるようにしています。応援する側とされる側の関係で終わってはもったいない。その先まで意識して、良い関係を築いていきたいと思っています」

取材後記

二階での取材中、「玄関前に暑くてバテ気味のおばあちゃんがいる」という、子どもたちの呼びかけにすぐに反応した鮎沢さん。オープン前のロビーでその方の話を聞き、休ませてあげていました。困ったときは支え合うという、地域本来の豊かな人間関係が、菊の湯の周辺にはありました。

学校が外部の人と協働で何かを行おうとするとき、「失礼があったら」「迷惑ではないか」と気後れしそうですが、地域には、若者の成長に協力したいと考える大人が少なからずいることを素敵だと思いました。



CASE 2

大宜味村観光協会（沖縄県大宜味村）

沖縄本島北部・やんばる(※)にある大宜味村。

その観光協会で、会長兼事務局長を務める大崎史丸さんは東京からの移住者です。

その“よそ者”が、「おじい・おばあ」をはじめとした地元の住民と、どのように関係性を築いてきたのか。

協働する際に心掛けていることなどを伺いました。

沖縄本島北部に位置する大宜味村は、美しい海と森林に囲まれた、人口3千人に満たない小さな村だ。「長寿の里」「シークワサーの里」とPRしているが、近隣の自治体と比べ、観光地としての派手さはない。そんな村

の観光協会で働くため、映像制作の仕事を辞めて2021年に東京から移住してきたのが大崎史丸さんだ。翌々年には、会長兼事務局長となり、村の観光振興に力を入れている。地元の魅力発信だけではなく、官公庁のモ

※沖縄本島北部の、山や森林など自然が多く残る地域。



デル事業に携わるほか、役場が公募する町おこし関連の事業を積極的に受託。“長寿の観光資源化”から、世界自然遺産の生態系を守るための保護猫の里親募集まで、活動の幅は広い。最近は、大学生や高校生の研修も熱心に受け入れている。

そうした実績から、強い目的意識をもった町おこしの仕掛け人をイメージしそうだが、未来のビジョンを全面に押し出して仕事の計画を立てるタイプではない。村の人たちと酒を酌み交わし、時間をかけて関係性を築きながら、必要なことを少しずつ形にしていくスタイルだ。

「事情を知らない“よそ者”が熱をもって、あれこれやろうとしても空回りし、求められていないことまでしがちです。誰かと協働するにしても、相手の性格や嗜好、得意分野を知らずに協力依頼するのは違うと感じていて、時間をかけて信頼関係をつくるのが、長く関係性が続くための近道だと思います」

大崎さんが、村の人に会いにいく際、決めていることがある。できるだけ、後ろに予定を入れないことだ。

「本当の用事は10分で終わるとしても、今朝採れた野菜の話や、お孫さんが遊びに来た話など、前後の世間話にこそ、その方の人柄や悩み、やりたいことなどヒントが隠れています。なので、『次の予定があるので、この辺で失礼します』とならないよう心掛けています。そうやってとことん話を聞くようにしていると、



この方に聞きました

大宜味村観光協会 会長 兼 事務局長

大崎史丸さん

おおさき・ふみまる ● 1987年大阪府生まれ。東京の映像制作会社に13年間勤めたのち大宜味村へ移住。2021年より一般社団法人大宜味村観光協会に勤務し、翌年事務局長、翌々年会長兼事務局長に。移住5年目の現在は「観光は、対話と交流をひらくもの」という視点から、村の未来を考える観光教育や、村人の暮らしを訪れる人にそっと手渡すようなプロジェクトに取り組む。

今もよそ者扱いではありますが、『困ってるんだけど、いいアイデアないかな』など、向こうから声をかけていただけるようになってきました」

ただし、と付け加える。

「人の話を聞くと言いつつ、自分のこともべらべら喋っているんですけどね。相手は、近所のおじい・おばあだったり、役場の職員や観光事業者、観光客、滅多に会えないお偉いさんだったりさまざまです。そうした場では、『なんとなくこんなこと考えてるんです』くらいの軽い気持ちで、言葉自体も未熟なんだけど、口にすることで、相手から反応があるし、自分でも持ち帰って勉強するじゃないですか。

そうやって学び、考えを深めるなかで次第に、未熟だった言葉が、自分自身の本当の言葉に変わっていく気がするんです。すると、幸運なのか必然なのかはわかりませんが、関連する人を紹介されたり、貴重な情報を頂いたり、どこからともなく解決の糸口が訪れる。最初に意味を深く考えることも大切かもしれませんが、それで言葉や行動が止まってしまうのはもったいない。意味はあとから育つものだと思います」

村の魅力と課題を広める 仕掛け「おおぎみ案内人検定」

大宜味村観光協会では、大掛かりな観光イベントには力を入れていない。

「それよりも、地域の人々との日々の関係性づくりが役割だと思っています。言うならば、

Doing（単発のイベントや目に見える成果）より、Being（日常や暮らし、過程）の中にこそ、深い学びと問いが宿ると考えているんです。豊かな自然も自慢ですが、大宜味村最大の魅力は、土地に暮らす人そのもの。日々の生活の積み重ねの上に、素晴らしい文化があることを観光客はもちろん、村民にも再認識してもらいたくって」

そこで役場との協働で計画中なのが「おおぎみ案内人検定」というエンタメ要素の強い観光教育プログラムだ。住民が村について学び、暮らしを見つめ直すことで、一人ひとりが“村の観光案内人”になることを目指している。

「検定といっても、好きな時間にオンラインで受講できる簡単な内容です。問題の中には、村の魅力だけではなく、例えば400年続く祭りがあるけれど担い手不足で困っているとい

SUMMARY

協働の 目的

生物多様な自然を除き観光資源に乏しいと思われがちな大宜味村の最大の魅力は、そこで暮らす人々そのもの。その価値を、観光客はもちろん村民自身に認識してもらうため各所と地道な関係づくりを行う。

協働する 相手

観光事業者、役場の職員、おじい・おばあほか地域住民、地元の中学校、研修受け入れ相手の教育機関や学生・生徒など。

働きかけ方 の工夫

まずは相手の話をとことん聞き、信頼関係を築くことからスタート。一方で、言語化手前の自分の思いを誰彼となく話し続けることで、言葉の意味を育てていく。また、わからないことは素直にわからないと言うことから対話を広げていく。

った“弱み”も伝えたい。それによって観光客や、元村民が特産物を購入したり、村を再訪したりなど、手を差し伸べてくれる機会になればなって」

**誰かのお仕着せではない意図せぬ
交流だからこそ生まれる関係性**

今年度は、大学生や高校生の研修も積極的に受け入れた。

「大宜味村の魅力は暮らしそのものとは言ったものの、村には宿泊施設が少なく、日帰りの観光客が多いのが課題です。そんなことを、やはりいろいろな場所で口にしていたところ、武蔵野大学ウェルビーイング学部の先生を紹介いただき、実習先の一つとして、この夏19人の学生を受け入れることになりました。特別なプログラムではなく、自炊しながら16日間暮らし、村の魅力を探るだけ。2週間近くいると、おじい・おばあも気になるのか、『バナナが食べ頃だから取りにおいで』『三線を弾けるおじいを呼ぶから一緒に踊ろう』など、意図せぬ交流が始まりました。各自がウェルビーイングとは何か実感したことでしょうし、私自身、無理に“長寿”を観光コンテンツにしなくても、共に過ごすだけで、観光になるんだと

気づかされました」

**わからないと言った途端
不思議と、わかる人が現れる**

大崎さんは、地元中学校の総合的な学習の時間でも外部講師をしている。

「村の教育委員会から『教員歓迎会で、大宜味村について語ってほしい』と依頼され、教育と観光の関わりについて話したことがきっかけです。初年度、観光をテーマに10回の講座を担当し、3年目の今は、担任の先生たちと相談しながら週1回、全30回の講座を開催しています」

学校と協働するなかで、どんなことを感じているだろうか。

「学校の先生は、言葉遣いに気をつける必要があるし、今どき、うかつに叱れない事情もありますよね。だからこそ私が代わりに、『世の中にはこんな大人もいるんだぞ』というスタンスで、本音で生徒に接しようと心掛けています。それに関連して、先生方も、わからないことは、わからないと生徒の前で発してもいいのでは、と感じています。私の経験上、わからないと言った途端、不思議とわかる人が現れるんです。答えをくれる人とは限りません。

話を聞く。思いも伝える。その時点では
曖昧な言葉でも、そのうち意味が育ってくる



夕方になると、近所の人と酒を酌み交わしながらの会話が始まる。白浜区長の親川富成さん曰く「たまに、見かけない若い人が来たら、どこからねとか聞いてね、そしたら話が盛り上がるでしょ。県外から来た人は、違った見方で村を見てくれるので楽しいよ」

同じく迷っている人や、かつて同じところで立ち止まっていた人からヒントをもらうこともあります。そういう私自身、東京で気を張っていた時代は、わかったふりをし続けていました。けれどそんな人間関係に疲弊してしまい、だからこそ『暮らしや会話が仕事の真ん中にある場所を探したい』とやってきたこの村では、わからないと声を出し続けたい。それが誰かとの対話の始まりになると信じています」



取材 後記

一般的に、他者と協働する際は目標を共有し、課題を洗い出して計画的に進めようと思いますが、大崎さんのアプローチは異なります。まずは相手の話をとことん聞き、信頼関係を築く。そこで生まれた思いや何気ない言葉に、時間をかけて意味を与え、成すべきことを見出していきます。ゴールをつくり、そこをみんなで目指すというよりは、まずは共にスタートラインに立ち、一緒に走り出すことを重視する。強固で、長い関係が続く秘訣なのかもしれません。

地域と学校の 「協働」の土壌は どのようにして 育まれたのか？

島根県の益田市では、次世代育成を「ひとつくりに」と捉え、多様な大人との対話や協働を通して地域全体で子どもたちを育む「ライフキャリア教育」を10年前から実践しています。地域と学校の協働が日常となっている背景や取組について、関わる各方面の担当者の方々に集まりいただき座談会を開催しました。

廣田理史先生
島根県立益田高校

益田市内の進学校でSSH担当。地域連携を急伸させている。

檜垣賢一さん
一般社団法人
豊かな暮らしラボトリー
(略称：ユタラボ)
代表理事

中間支援団体として取組開始時から地域と学校、生徒をつなぐ活動に従事。

石川有里さん
益田市西益田公民館
公民館主事

子どもと大人をつなぐ地域連携の要となっている公民館の、生徒たちの相談役。

中島尚子先生
島根県立益田翔陽高校
総合学科科長

課題研究(探究活動)で地域連携を必須とし生徒と地域をつないでいる。

三宅康将先生
島根県立益田養護学校
地域連携セクション

学校運営協議会をフル活用し、卒業後も生徒が生き抜く力をつける羅針盤を作成中。

桐 雅幸さん
益田市教育委員会
ひとつくりに推進課
社会教育主事

市の「ライフキャリア教育」を推進し、子どもも大人も輝くまちづくりを進行中。



幼児期から青年期まで、学校と地域の 多様なプレイヤーが縦横に連携

「自分はどうありたいか」を 職業以外の大人の姿から学ぶ

島根県の西端に位置する益田市。合計特殊出生率は国や県の平均よりも高く推移しているものの、進学や就職による青年層の人口流出や、少子高齢化による人口減少が長年の課題となっていた。高度経済成長期から「過疎」発祥の地と言われてきたこともあり、島根県の取組である「ふるさと教育」や職業観を育成するキャリア教育に力を入れてきたが、青年層の人口流出に歯止めはかからなかった。

こうした背景から、2015年の「益田市総合戦略」において、人口減少問題の克服と持続的な発展に向け、幅広く将来の地域を担う人材の育成＝「ひとづくり」を目指し、改めて「益田市ひとづくり協働構想」を策定。「ひとが育ち 輝くまち 益田」をまちの将来像に掲げ、市政全体でひとづくりに取り組み始めた。

市の教育委員会では、従来のキャリア教育が、職業観に偏重した「ワークキャリア教育」であったことが、生徒たちが都会志向になり市外への流出の一端を担ってしまったの

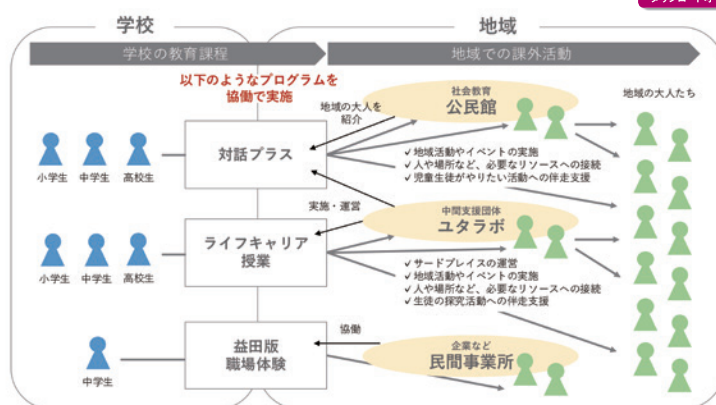
ではないかと考えた。また、地域についての「ひと・もの・こと」を「知る」ことに留まっていたふるさと教育に対して、地域の人々との出会い、つながり、対話し、協働することで子どもたちの人生観を育む地域教育を目指すこととした。職業人として以外の余暇や家族人としての顔ももつ地域の大人たちの姿に触れ、「自分はどう生きたいか？ どうありたいか？」を考える「ライフキャリア教育」へと舵を切った。

10年間の継続で、若者の 地域への意識が確実に変化

益田市の「ライフキャリア教育」の特徴の一つは、学校教育課程のなかで生徒全員が受けるプログラムにおいて、地域の大人と語り合う場を設定していることだ。学校と地域の接続には、地域の公民館や、「豊かな暮らしラボラトリー（以下、ユタラボ）」という中間支援団体など外部の支援を受けることで、幅広い地域の人々とつながる横展開が可能になっている（図1）。

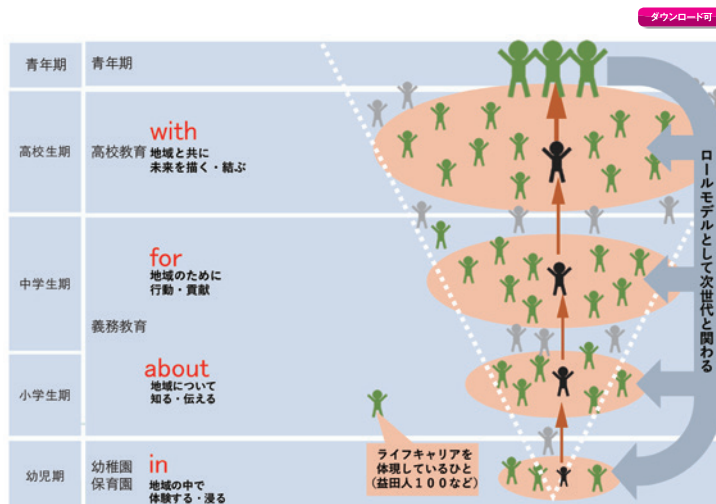
もう一つの特徴は、幼児期から青年期まで成長段階に合わせた取組を行い、地域との関わりを段階的に広げていきながら、生徒自身が下の世代のロールモデルとなっていく

図1 学校のプログラムを地域資源が支える



出典：林知里「地域における学びと当事者性の育成ー島根県益田市の『ライフキャリア教育』に見る、高校生の変容に着目してー」2024

図2 発達段階ごとの活動を通し、次世代のロールモデルに



「益田市の未来を担うひとりづくり計画」より

縦展開の循環を構築していることだ(図2)。

縦横のプログラムで地域の大人や支援組織との連携をきっかけに、公民館やユタラボの伴走支援を受けながら、生徒たちは学校教育課程以外でも個人的な地域での探究活動や、地域活動に参加し始める。「ひとづくり」を共通の上位概念に、家庭や学校外の大人たちが子どもたちを引き受け、地域全体で子どもたち

を育てていく環境が創られている。10年間取組を続けてきたことで、一度まちを出た若者が戻ってくるなどの成果が見え始めている。

異なる立場同士で施策を進め、継続してきた秘訣や、それぞれの立場での思い、生徒や地域の人々の変化について、「ライフキャリア教育」を支え、実施している多方面の関係者の方々にお集まりいただき、語り合ってもらった。

ダウンロード可

※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.456)

地域連携の目的は？

——益田市の「ライフキャリア教育」の中心的プログラムが「対話プラス(旧称・益田版カタリ場)」(30ページコラム参照)とのことですが、対話を重視した背景にはどんなことがあったのでしょうか？

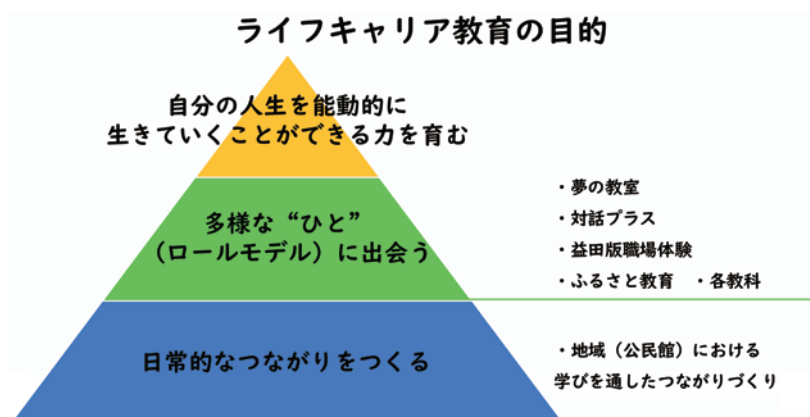
桐(教育委員会) 益田の子どもたちはもともと地域の人にはきちんと挨拶しているし、都会の子どもに比べたら圧倒的に話していると大人は思っていたのです。ところが、2018年に益田版カタリ場の事前アンケートを実施したところ、「地域の大人と話す機会がよくある」という問いに対し、61%の中高生が「そう思わない」と回答し、衝撃を受けたのです。

檜垣(ユタラボ) こうした地域課題に取り組もうとしたときに、当時の教育委員会の社会

教育課の課長が「市の中だけで考えたら、発想が限定的になってしまうだろう」と、外部の専門的な力を求め、島根県教育庁の教育魅力化特命官だった岩本 悠氏やNPO法人カタリバ代表の今村久美氏などに声をかけ、支援を仰いだのがスタートでした。外部の有識者にも入っていただいた「益田市の未来を担うひとづくり計画策定委員」で、**既存のキャリア教育やふるさと教育では、同じ成果しか出ないので、もっと人と出会うような取組が必要**という方向性になり、そのときに出てきたのが「ライフキャリア教育」という考え方だったのです。

桐 益田市のライフキャリア教育の最終目標は「自分の人生を能動的に生きていくことができる力を育む」こと(図3)。そのためにはどん

図3 益田市のライフキャリア教育の目的



な仕事がしたいだけでなく、どうありたいか、どう生きていきたいかという、**職業人として以外の「今を生きる」大人の生き方に触れることが重要**と考えました。そのために、地域のさまざまな大人とつながりをつくり、話を聞き、大人と子どもが協働する場を設けることになり、すべての小中高生が受ける中心プログラムとして「対話プラス」が始まりました。

石川（公民館） 4万人余りの小さな市でのライフキャリア教育には、地域の大人全体の力が必要です。そこで、**大人も自主的に地域活動に参加する場として、公民館の位置づけが再定義されました。**それまで公民館は趣味で何かやりたい人が集うような場所で「ひとづくり」という意識はまったくありませんでした。そこに「つろうて（「みんなで集う」という方言）子育て協議会」という地域の任意団体を立ち上げて子どもに関わったり、「どんどん地域の人を巻き込め」と言われたりして、公民館の活動がガラッと変わりました。

檜垣 今では公民館がライフキャリア教育の要の場となっています。

——高校現場や高校生が実践しているライフ



キャリア教育の取組について教えてください。

桐 本来、市の管轄は中学校までですが、市内に高校が4校と高等部を含む養護学校1校があるのでユタラボさんに間に入ってもらい「益田市未来の担い手の育成コンソーシアム」という協議会に高校にも参加してもらいました。

「対話プラス」は小中高では授業の一環として取り組んでもらっており、ほぼすべての生徒が参加しています。高校生は地域の大人と語り合う一方で、高校生自身が語り手として、これまでの自分の成長を振り返り、小学生に語るために自主参加しています。少し年上の先輩と話すことで小学生が中高になった自分をイメージでき、ロールモデルが循環する流れが出てきています。



桐さん

**知識偏重の地域教育から、
今を生きる大人と出会い、
つながるライフキャリア教育へ。**

／ 高校におけるライフキャリア教育① ／

対話プラス

「対話プラス」は、1対1の対話を通じて「これまでの人生、今の自分、そしてこれからどんな人でありたいか」という自分自身の生き方について考えることで、自分の「心に火を灯す」授業。対話の対象は、小学生×高校生、中学生×地域の大人、高校生×益田の大人。高校生は大人と語る場と、小学生にとってのロールモデルとして語る場の両方の機会がある。運営と進行はユタラボが担当し、市内のほぼすべての小中高校で実施されている。語り合う内容そのものよりも、本気で向き合ってくれる大人の存在や、自分は一人ではないと思える機会の創出を重視している。



檜垣 ユタラボの活動としては、各校の総合的な探究の時間や課題研究などで地域と学校をつないでいます。学校活動外では「高校生を中心としたサードプレイスなど、中高生がふらっと寄れて、自分たちのやりたいイベントなどを企画できる居場所の運営を市からの委託を受けて行っています。益田の高校生はこの10年間の取組で、中学校までに「何もないところから何かを創る」ことを経験しています。「益田は過疎で何もない」と最初は言うのですが、「ないからこそ自分たちで創ろう」と働きかけると、子どもたちはいろんなイベントなどをやり始めます。ないからこそ創る喜びを経験しているので、高校生になっても学校を介さずに「あれやろう、これやろう」と自発的に取り組んでいます。

石川 それは私が言いたかった(笑)。私たちの住む西益田は高校がないのですが、中学校までに子どもたちは公民館をフル活用しています。高校生になったときに学校の授業ではないところで「地域のイベントの実行委員になりたい」など、公民館との関わりを求めてくる生徒さんが出てきています。

地域とつながった学びで、
将来地域に貢献できる
生徒を育てる。



中島先生

学校と地域をどう結ぶか？

——今日は益田市内にある県立高校と県立養護学校の先生にもお集まりいただいています。各校の現場での地域連携の取組について教えていただけますか？

中島（益田翔陽高校） 益田翔陽高校（以下、翔陽）は電子機械科、電気科、生物環境工学科、総合学科という4つの科を持つ複合型専門高校で、私は総合学科を担当しています。総合学科の科目「産業社会と人間」や課題研究で、地域に生徒たちが出て行っています。

課題研究や地域連携は生徒も教員も大変です。生徒のためになるのか実は最初は懐疑的でした。しかし、自分自身が育休中に、子育てする人を迎え入れてくれる地域の人々の存在や取組が多々あることに気づいたのです。子どもが芸術に触れて遊べる隣の市の施設を長年利用していて、家庭科教員と

して益田市でもそれと同じようなことを生徒と一緒に学校活動としてできるのではと考えました。「保育履修者が家庭科で学んだことを地域で実際に還元できる取組としてやってみたい」とユタラボさんや地域の人に相談すると、協力してくれる人が次々に出てくることに驚きました。しかも一度つながると関係が深く広がっていくのです。市の10年間の取組について今日の桐さんたちのお話で初めて知ったので、そういうことか、と腹落ちしました。

檜垣 翔陽は開校以来、PDCAをきちんと回して地に足がついた探究をしていらっやいます。中島先生がいらしてから「地域連携するよ!」と旗を振ってくれているので、さらに生徒が実践的な経験を積むことができ、探究の深度を深めていると思います。進路の際に地域での体験を自分の言葉で語れる生徒が多く、就職や進学 of 総合型選抜で良い



三宅先生

学校運営協議会をフル活用して、
養護学校と地域との
良好な関係構築を再整備。

結果も出てきていますよね。

中島 1年生の「産業社会と人間」や2年生の専門科目の授業などで地域の大人とのつながりをたくさん体験しているので、3年生の探究活動では生徒たちが主体的に動いています。生徒が成長して自発的に動けるようになると、地域連携での教員の負担も軽くなると感じています。

廣田(益田高校) 益田高校(以下、益高)の探究活動は、翔陽ほど地域連携はまだできていないと思います。ただ、**従来一般選抜**でいわゆる上位大学受験が当たり前だった空気が、**高校時代の体験を活かした総合型選抜**を選ぶ生徒も出てきて、ここ数年で変わりつつあります。

檜垣 外から見ると、今、地域で一番変化しているのが益高なのです。先ほどの石川さんのお話のように、中学時代までに学校外の公民館やサードプレイスで地域活動をしている生徒が高校生になっても続けているケースが益高生でも増え始め、彼らが島根大学のへるん入試などの総合型選抜で進学し始めています。

廣田 生徒たちの学外の活動を教員は把握しきれていないのですが、ユタラボさんから「益高の生徒さんがこういう活動に来ていましたよ」と教えてもらったり、進路面談で生徒から「地域活動を題材に総合型選抜で進学したい」と言われて初めて知ったりすることもあります。時代の流れもありますし、生徒た

／ 高校におけるライフキャリア教育② ／

ライフキャリア授業

27ページの図1・2のように幼児期から中学校までのライフキャリア教育プログラムで積み重ねてきた経験と成長を基に、高校では実践的に社会と結びつき、自分の進路目標や生き方を考えていくプログラムを行っている。ユタラボや公民館の支援によって総合的な探究の時間や課題研究などで実際に地域に出て行き、地域社会における課題解決や挑戦を通じて「社会の一員としての自分」を試してみること、生徒自身がより能動的な生き方や進路目標をもつことへつなげている。(写真は益田市が認定された日本遺産を高校生の視点でガイドをしている探究活動の様子)



ちの変化に若手教員が刺激を受け、教員側も総合型選抜に肯定的になってきています。

桐 教員の変化は高校だけでなく中学校でも起きていますね。「対話プラス」などで外部の人が相手だと、生徒たちが自分のことを一生懸命に語る姿を見て、地域と関わっていくことの効果を先生方が感じて地域連携を広げていったりしています。中学生たちは総合

的な学習の時間で公民館に出かけて行って地域の方々とつながってプロジェクトを進めています。それが楽しくて授業以外でも休日に公民館に行って個人的な探究をしている子もいるのです。その中学時代に学校内外で積み上げた地域との連携が、しっかりと高校の探究活動につながるようにすることが、これからの課題と感じています。

——三宅先生の益田養護学校の地域連携は、翔陽や益高とは異なるつながりになるのでしょうか？

三宅(益田養護学校) 益田養護学校(以下、益養)は小中高を包括していて、私は高等部の教員で地域連携セクションを担当しています。高等部の生徒は卒業後にほぼ100%地元で就職しますので、地域は生徒たちにとって生きていく場所。地域との関わりは本来欠かせないもので、学校が創立した25年前は地域活動は非常に活発でしたが、経年で地域連携が形骸化してしまい、一時途切れていた地域連携セクションが4年前に復活しました。しかし、具体的にこれからの地域とのつながりをどうしたらよいか悩み、学校運営協議会に助けを求めたのです。

檜垣 私や石川さんも益養の学校運営協議会(以下、協議会)に入っていますが、**三宅先生は協議会を形骸化させず、「助けてほしい」と我々をフル活用してくれます。**

三宅 学校にいと自分たちの立ち位置も他校の取組もわからないので、協議会の方々の

情報や客観的な視点は非常に重要なのです。

石川 協議会で益養が育てたい生徒像を直接聞いたことで、地域で生きていく卒業生たちを地域のどこにつなげばいいかが明確になり、協力しやすくなりましたね。

檜垣 益養では生徒が作る製品の販売や地域のイベントのお手伝いなどは以前からやっていました。従来の地域連携は地域「貢献」と捉えられることも少なくありませんでした。ですが、学校運営協議会の働きかけもあり、ここ数年で、さまざまな取組が、地域にとっても学校にとってもWin-Winで、かつ持続可能なものなのかが議論されるようになりました。

三宅 学校は生徒が卒業するまでにつける力しか考えていませんでしたが、ユトラボさんや公民館の方々は卒業後のことを語ってくれて大きな気づきになりました。**生徒たちに生きる力をつけたいと考えてきましたが、それは働く力だけではなく、余暇や生活の時間も含めて地域とのつながりのなかで基盤となる関係性や、自分の居場所を見つけることなのだ。**ユトラボさんのサードプレイスのイベントに生徒が参加して小さな実体験を積むだけでも、学校や家庭以外にも地域に居場所があることに生徒たちが気づく種まきになっています。

石川 益養の卒業生が将来の地域の創り手になることは間違いありません。地域連携セクションが復活したことによって、地域での益養の存在感が確実に大きくなっていると感じます。

多様な組織間の連携の秘訣は？

——教育委員会や学校が、地域や外部の組織の人々とつながりを持ち、継続させていくために留意すべきはどんなことでしょうか？

桐 地域連携するときに間に入ってくれる中間支援団体や公民館などの存在が非常に重要と認識することです。教育機関は生徒の成長を第一に考えますが、関わってくれる大人のメリットも考えなければうまくいきません。いかに同じビジョンを描くことができるか、**中間支援団体が教育機関と地域の想いをうまく翻訳して結んでくれると実感しています。**

檜垣 中間支援団体の立場からすると、団体の入れ方に注意が必要です。相手方の立場がわかる人の配置が重要で、ユタラボでは教育経験者や公民館経験者を採用しています。経験者を増やすために教育機関、民間、地域間での派遣制度など人材交流をもっと増やした方がいいと考えています。

石川 **お互いを知ろうとすること、自分の想いを伝えることが大事です。**西益田では、小中学校の全教職員と地域の人々、子どもたちの代表、コーディネーターなどが集まる「WITHの会」という会議を年1回やっています。この会は子どもたちがやりたいことを言えて叶える場です。全教職員が子どもの想い

を共有できる場になっています。

廣田 大人のメリットで言うと、地域連携が盛んだった前任校では、当初は地域の方が無償で協力してくれていましたが、無償だと継続しません。**生徒と学校と地域のWin-Winの関係が大事。**大人も楽しめて、交通費くらいは提供しないと次につながりません。外部の他業種の方々は教員がもっていないマインドで子どもたちの視野を広げてくれる存在で、外の方に入ってもらった方が確実に教育のバランスがよくなりますから、その方々が生徒と関わって良かったと思ってもらえる仕掛けや配慮も必要だと思います。

また、自分の譲れないことははっきりとお互いに伝えることも大事。私も檜垣さんにはそれを伝えています。

檜垣 異なる立場同士の協働は簡単ではありません。それには時間も必要で、益田では10年間の活動の蓄積のなかでの信頼関係の連鎖ができあがっています。我々のような中間支援団体ではない一般の方で“コーディネーター的”な動きができる市民が続出してきただけでも、益田での異業種連携がうまく回っている一因だと思います。

益田市はどう変わったのか？

——益田市のように学校を開き、地域と連携することで、生徒たちと地域の変化を皆さんはどう感じていらっしゃいますか？

中島 翔陽では1・2年次に「いろんな人とつながって、失敗も経験しておいで」と生徒を外に出すと、いろんなことに挑戦して地域の人にほめられて、次に動く力になっています。それが実を結ぶのが3年生です。総合型選抜の受験者の面談などを通して、さらに伸びていく子もいる。**地域での活動が当たり前になっているせいか、それが受験のアピールポイントになると自覚しておらず、教員から「すごいね!」など声かけすることで気づきになることも多いです。**地域活動で成功体験を積んだ卒業生たちが、「産業社会と人間」の授業のロールモデルとなって自主的に後輩に教えに来てくれることも多々あります。

廣田 うらやましいですね。益高では総合型

選抜が増えるなど少しずつ変化はあるものの、進学校としてのジレンマは探究の発表がある3年生の6月が過ぎると受験モードに入って、それまでの地域の学びがほやけていってしまう生徒もいることです。翔陽のように深掘りした探究にしていけることがこれからの課題です。

檜垣 客観的には、益高で充実した探究活動ができた生徒は、それが将来の夢や受験のモチベーションになっていることも多いと感じています。

三宅 益養は今、地域とつながる基盤ができてつつある段階です。本校の生徒たちは自尊感情が低かったり、学校外の経験値が圧倒的に少なかったのですが、学校外でイベントに参加したり、製品販売のボランティアをする高等部の生徒が増え始めています。**地域との関わりのなかで少しずつ成功体験を重ねている**ことが見て取れるようになってきました。

学校と地域の連携継続には、
大人もメリットがある
Win-Winの関係が重要。



廣田先生

生徒たちにとって地域が身近な存在になり、「してもらう」ことが多かった生徒たちが「する側」になってきている。地域の方の反応を石川さんがフィードバックしてくれることもとてもありがたいですね。それが教員も生徒も次の挑戦へのモチベーションになっています。

檜垣 大学進学などで一度県外に出ても、その後に前向きに益田に戻ってくる若者が増えています。若者が地元に戻ってくるときに必要なのは、何かができる・できないは関係なく、ありのままの自分を受けて入れてくれる存在の数の多さだと思います。資本主義社会の原理で測られがちな相対的な物差しではなく、ありのままの自分を、親以外でどれだけの人が受け入れてくれるか。益田はその存在が圧倒的に多く、それがライフキャリア教育での大人の変化だと思います。

桐 益田の里帰りは家という建物や実家だけではなく「人に帰ってくる」イメージです。それは10年間の取組で、大人と子どもが学校以外の場所でもたくさんの共通体験を積んできたから。子どもとの関わりに、大人も参加して良かったと普通に言ってもらえる土壌ができ

てきました。

石川 翔陽の卒業生で「地域活動をしたいから土日が休みの会社に就職した」という子がいます。理由を聞いたら「子どもたちの“やりたい”を叶える大人になりたいから」と。ライフキャリア教育で受けたロールモデルの循環が実っていると感じました。

——最後に、地域連携についての皆さんの想いをひと言ずつお願いします。

三宅 地域の方々とつながると自分自身が楽しいのです。世界が広がって一人の人間として、人と人との関係性が豊かになっていると実感しています。

石川 子どもが変わると大人が変わり、大人が変わると地域が変わります。その中の一員でいられることがとてもありがたいです。人同士の関係性が深くなったことで「安心できるまちになった」という大人もいます。そういう夢や希望を子どもたちの姿を通して見られているのは、地域にとっても素敵なことだと思います。

檜垣 やはり10年という継続と積み重ねが大事だと思います。振り返って1年目の自分に言いたいことは「闘うな」ということ。施策を



檜垣さん

益田には若者たちの
「ありのまま」を受け入れる
存在が圧倒的に多い。

学校外で生徒が主体的に地域と連携

公民館・学校外活動

公民館を「ひとづくり」の拠点と再定義したことから、生徒たちが学校活動とは別に自発的にやりたいことを、公民館を利用して活発に行っている。石川さんのような公民館の主事たちが相談役となり、最適な人とつなげたり、場所を提供したりしている。例えば、地元愛の強い高校生が探究活動の延長として、地域の自治組織の会合で、空き家についてのワークショップを行ったり（写真上）、中学生に家庭・学校以外のサードプレイスを提供し、中高生のつながりをつくりたいという思いから高校生が企画したマシュマロトークという対話イベント（写真下）などが実施されてきた。



通したくて周りとは軋轢が生じていたこともあります。今思えば時と相手を間違えていた。チャレンジする際にタイミングとパートナーを見極めることも大事ですね。

中島 地域とつながることは、事前は不安でしたが、百聞は一見にしかずです。つながってみると生徒にできそうなことがどんどん具体的に想像できて実現できました。とにかく「行って、会って、やってみる」ことです。やってみると次につながっていきます。

廣田 地域とつながって偏りのない幅広い教育を行うことが、子どもたちの学びを深め、それが子どもたちの幸せにつながっていくと感じています。

桐 子どもを育てるのは教員だけの仕事ではなく、教員が思うよりたくさんの方が協力してくれます。面白がって子どもと関わってくれる人がいると、中島先生がおっしゃっていたように周りに伝播してつながってうまく回るようになります。それが子どもたちのため、ひいては自分も含めた大人のためになります。

子どもが変わると大人も変わり、
大人が変わると地域が変わり、
安心できるまちになる。



石川さん

ライフキャリア教育を体験した卒業生の声

2015年から市が実践してきた「ライフキャリア教育」を受け、学校内外で地域活動を経験した卒業生である大学生と社会人に、経験で得たこと、地域への想いを語ってもらいました。



益田は地域全体が「実家のようなまち」

島田郁子さん

市立吉田小学校→市立益田中学校→県立益田高校卒
島根大学 法文学部 社会文化学科在学中



周りから引かれるくらい益田が大好き（笑）。自然がたくさんあるし、何より人とのつながりが広くて濃い。自分の成長を見てくれていた大人がたくさんいるので、帰るたびにまち全体が実家のよう

なんです。高校時代には自由参加の小学生対象の「対話プラス」に全15校中13校も参加しました。また、高校の課題研究をきっかけにジェンダーに興味をもち、授業とは別に個人でも活動を始めました。考えを深めるためにほかの人の意見を聞くイベントを開催したときに（写真）、探究担当の先生やユタラボの方が伴走してくれました。その経験を活かして総合型選抜で島根大学に合格。現在は大学でジェンダー論について学ぶなかで、ジェンダーは早期教育が必要だと考えようになり、将来は教員や子どもと関わる仕事を益田でできたらいいなと思いながら、教職課程でも学んでいます。



自分が地域のロールモデルの一員と自覚

小野涼太さん

市立豊川小学校→市立益田東中学校→県立益田高校→大正大学卒
現在は益田市でマルチワークで活躍中



中学時代に仲間と地域のお手伝いなどの活動をしていて、自分を受け入れてくれて居心地が良い地域が好きになり、将来は地域に貢献できる人になりたいと考えていました。目先の勉強が大変で進

路について考える余裕がなかった高校時代には、「対話プラス」の授業で地域の方と話したことが立ち止まって将来を考えるきっかけに。自分も貢献したいと小学生と話す役割も買って出ました（写真）。活動の中で出会った地域のさまざまな大人に刺激を受け、大学は東京に出て地域創生を学びましたが、その間も「いつでも帰ってきていい」という地域の温かさを感じていました。卒業後は益田に戻り、現在、ユタラボと保育園でマルチワークしています。保育園では自分がロールモデルになっていることを体感。子どもたちに恥ずかしくない生き方をしなければと日々感じています。

学校と地域の関係性を変えた

「はじめの一步」集

学校と地域を協働する関係に変えていく、
というのは、壮大なテーマだけに手に負えないような気がしてきます。
ですが、今は連携が取れている学校も、始まりは誰かの小さな一歩だったかもしれません。
そのファーストアクションに焦点を絞る形で、さまざまな学校のお話を伺いました。
ご自身の学校現場に応用できそうな「一歩目」が見つければ幸いです。

Tips

1

話す

まず誰かに話してみる、
相談してみる

Tips

2

書き出す

考えていることを
紙に書き出してみる

Tips

3

受け止める

地域や企業など
学校外の提案を聞いてみる

Tips

4

校内で頼る

学校内の先駆者や
専門家に相談する

Tips

5

校外を頼る

学校の外にも
頼れる人を見つける

Tips

6

小さく始める

できる範囲から始めて
広げていく

Tips

7

磨き込む

よりよい活動に
進化させていく

取材・文／松井大助
イラスト／桔川シン





話す

…まず誰かに話してみる、相談してみる

普通科の探究活動『くまたん』において、生徒たちが「自分の興味・関心」と「地域資源」を掛け合わせて、課題の発見とその解決に挑む。

一緒に考えてくれる相談相手との出会いが、 地域連携を加速させた

本校では、以前から森林環境科は地域の中で学んでいましたが、2018年度より普通科でも地域連携を推進してきました。きっかけは、愛媛県の教育事業でSDGs学習を始めたことです。一般の社会人のなかにも「生徒たちに授業やお話をしてほしい」と思える方がたくさんいることに気づいたのです。

そこで町役場に出向き、観光や移住、自然などの話ができる方はいませんかという「話す」ことをしました。すると、当初はふるさと創生課の課長が、役場の組織改編後はまちづくり営業課の副課長が、親身に相談にのってください、役場の職員の方はもちろん、中間支援組織ゆりラボさんや、美術館の学芸員、地域おこし協力隊員など、さまざまな方につなげてくださったのです。そうして連携を深めることができました。

相談しても、反応が薄い場合もあると思います。ですがどんどん話していくと、お願いした側・お願いされた側の関係を超えて、「この地域や子どもたちのために何かできるか」を、対等な立場で一緒に考えてくれる方とも出会えるんですね。そうして互いの事情を本音で話し合える方ができると、連携に弾みがつくと感じています。

上浮穴高校（愛媛・県立）
進路指導課長 白石将高先生

普通科と森林環境科がある。森林環境科では以前より地元で根差した課題研究を実施、普通科でも地域連携を推進。普通科の「くまたん」は以下 URL も参照。<https://kamiukena-h.esnet.ed.jp/file/6452>



書き出す

…考えていることを紙に書き出してみる

1年生の探究活動『Inage Image』において、地元の企業や公的機関、NPOなどから出された“ミッション”の解決策を生徒たちが探究する。

企画書で考えを整理・共有することで、 約40団体との連携を実現

地域と連携して探究活動をしたい。そう思った私がまずしたことは、地元の商工会議所や商店街の集まりで話すことで、よい反応はありましたが、「探究って?」という戸惑いも見られました。そこで取り組んだのが、自分たちのやりたいことやその意図を、企画書として「書き出す」ことです。どんな活動で、どういう協力を得たいのか。なぜこういうことを始めるのか。会社経営をする知人に助言をもらい、企業の人に届きやすい内容にすることも意識しました。そうして私が作った原案を、ほかの先生方にも見てもらって了承を得ました。

企画書を用意すると、協力を打診した団体の方が上司にもその文書で説明できるようになり、伝言ゲームで話が霧散することがなくなりました。ほかの先生方もおののにつながる外部の方との相談に企画書を活用、より話を進めやすくなりました。ゼロからの立ち上げでしたが、今では約40団体の協力を得られるように。探究した生徒たちの発案を、協力者の方々が取り入れて、公園の遊具やバスツアーを実現してくださるなど、まさに社会とつながる学びとなっています。

※地域連携のための企画書サンプル [ダウンロード可](#)

敬愛学園高校(千葉・私立)
教頭 石脇 淳先生

1年次に全生徒が地域密着の探究活動を行い、2年次以降は文系と理系に分かれて自分の問いを探究。探究活動の全容は以下URLの10～13ページも参照。<http://www.hs-keiai.ac.jp/nyuushi/pamphlet/>



受け止める

… 地域や企業など学校外の提案を聞いてみる

1年次の前半に、自分探究として約50人の社会人との対話などで自分を見つめ、後半は課題探究として身近な困りごとの解決を目指す。

外部の提案から教員が学び、 協働することでよりよい活動へ

本校では2023年度に、地元テレビ局と民間教育企業が支援してくれる「ひなた探究」を導入しました。県内の企業から生きた課題をもらい、用意されたICT教材を活用し、生徒が探究する活動です。私たち教員には探究活動の実体験がなく、進め方もまだ不慣れでした。だからこそ外部と連携し、提案を「受け止める」なかで、ここは本校に合うな、ここはアレンジしたいな、などと模索していこうとしたのです。

2024年度には、県のキャリア教育コーディネーターの1人が本校に専属で入ってくれることに。その方にも、我々のやりたいことから「こういうのが苦手で、どうしたらいいでしょう」という弱みまで正直に話し、知恵をもらって活動内容を一緒に作り込みました。結果、まずは多様な社会人約50名を校内にお呼びし、その対話から生徒が自分を探究、そのあとで地域課題に挑む、という今の活動の流れができました。

予算の関係もあって今は「ひなた探究」はしていませんが、今後も生徒が外に出るだけでなく、さまざまな社会人の方が「学校に来やすい」と思ってもらえる雰囲気を高めることで、社会に開かれた学校を実現していきたいと思っています。

宮崎商業高校(宮崎・県立)
キャリア教育支援教員 野口佐矢香先生

商業マネジメント科、情報ソリューション科、グローバル経済科がある。
各科の特徴や、日々の活動については生徒主体で運営している以下
公式SNSも参照。https://www.instagram.com/miyasho_high_school/



校内で頼る

…学校内の先駆者や専門家に相談する

生徒企画のまちの活性化プロジェクト、専門的に学んだICTや保育の知見を活かした地域支援活動など、探究活動を軸とした教育を展開。

校内で相談し合うことが、 生徒の背中を押す力にもなった

本校に来たのは7年前。地域連携が始まっていましたが、私は前任校までその経験がまったくなく、「校内で頼る」ことから始めました。連携の軸となっていた同僚に頼ったのです。

例えば、地域の人の協力を得る際は、私から連絡するほか、すでに関係性のある同僚からも一声かけてもらいました。「地域でこんな企画をしたい」と生徒から相談されたときも、どう助言するかを考えたら、その案をまず同僚にも伝え、意見をもらいました。一人で抱え込まなかったことで、未知の領域に踏み込む不安が薄れ、生徒とも前向きに関われました。

4年前から専属のコーディネーターも着任。我々がその方も頼っていくと、生徒にも良い影響が生まれました。以前は教員の手之余のような話は腰が引けましたが、今はまずコーディネーターと話し合います。その姿を見ていた生徒から「だから先生に相談しようと思った」と言われたのです。

地域での生徒主体の活動は、成功したと言えるのは10やって1つか2つです。ですが、失敗もしながら「次はこうしよう」「これができた」と成長していく姿を見て、挑戦した10のすべてが意義ある活動だと思うようになりました。

飯野高校(宮崎・県立)
進路指導部 千本泰史先生

2026年度より普通科とみらい探究科に。全国グローバルリーダーズサミット(グローバルに活動する生徒や社会人が集合)主催。地域活動等は以下SNSも参照。<https://www.facebook.com/iinohighschool>



校外を頼る

…学校の外にも頼れる人を見つける

多様な人が「ふらっと」に学校を訪れ、生徒が会いたい人を見つけては「ふらっと」に地域へ飛び出す、そうした探究活動を推進。

外に出る価値を自分が体感すると、 多様な社会とつながりたくなる

教育活動で、校内だけでなく「校外を頼る」こともするようになったのは、前任校で全国の先生が集まる研修に参加させてもらったのがきっかけです。外に出ないとわからない世界があると痛感したのです。以来、地域の集まりなど「自分の未経験な○○」に出会える場へ、意識的に足を運ぶようになりました。外に出ると、最初は少しずつ、しかしハブとなる方と出会うと加速度的に人の輪が広がることも知りました。

出会えた方とは「いずれ何か」の社交辞令の関係で終わらせないようにしよう、とも思ってきました。教育関係者なら、本校教員の課題感と重なる点から校内研修を企画したり、生徒に会わせたい魅力的な方がいれば、放課後イベントなど校内での承諾を得やすいところから企画したり。

外の世界にふれると「異なるものの見方」を知り、その視点で物事を捉え直すことで、今まで見えなかったものが見えてきます。自分と照らし合わせるなかで「見方の癖」に気づかされ、捉え方を見直すことでより自由な発想ができるように。いわば「見る」を知る。生徒でも教員でも、社会とつながる価値はまさにこうした点にあるのだと思います。

札幌西高校(北海道・道立)
探究推進委員長 館 龍之介先生

全日制と定時制がある。同校の探究活動では「問い」と「出会いと対話」をキーワードに置いている。詳細は以下のサイトのレポートや動画を参照。<https://www.mmfe.or.jp/partners/5411/>



小さく始める

…できる範囲から始めて広げていく

1年生は小課題研究。2年生は「地域活性化のグループ探究」「理数分野のグループ探究」「テーマ自由の個人探究」のいずれかを行う。

今の学校にあるリソースを生かしながら、 新たなことにも挑戦する

本校では、地域活性化に挑む探究学習を10年間継続してきました。探究の経験を進路につなげる生徒も現れ、成果を感じています。ただ、地域に目が向くあまり、自分の興味・関心をほかに広げられない生徒もいました。そこで大枠は変えずに「小さく始める」ことのできる要素を加えました。昨年度は、地域活性化のグループ探究を基本としつつ、個人探究や、理数分野のグループ探究も、生徒の希望に応じて選べるようにしたのです。「生徒一人ひとりの興味・関心が引き出されるようにする」ためのマイナーチェンジでした（中村先生）

探究学習は、総合的な探究の時間に行うのが原則ですが、個人探究の生徒が美術部の活動でも進められるようにしたり、理数探究の生徒が放課後にも実験できるようにしたりと、個別に柔軟性も高めています。前任校でも教育課程外の夏休みに地域連携講座を設けていましたが、社会に開かれた教育は、できる範囲から「小さく始める」のが良いと感じています。そのうえで、なぜそれを行うのかという目的を、校訓やスクール・ミッションを参考に「わかりやすい言葉」に落とし込み、皆の意識をつなぐことが大事だと思います（鈴木先生）

斐太高校（岐阜・県立）
探究活動推進部長 中村香月先生／
3年次主任 鈴木泰輔先生

岐阜県「地域課題探究型学習推進事業（教科横断型）」指定校で、地域の未来を担うリーダー育成を目指す。昨年度の探究活動の成果発表は以下URLを参照。<https://school.gifu-net.ed.jp/wordpress/hida-hs/2025/01/29/>



磨き込む

…よりよい活動に進化させていく

地元の企業や行政、大学、研究機関筑波学園の研究都市とも連携して「課題研究」(理数科)や『夢現∞プロジェクト』(文理共創科)を行う。

探究における生徒同士の関わりや、 外部との関わりが深まるように

本校では7年前から、企業や市役所、大学の方などと連携する探究活動を始めました。そしてやるからには、毎回前年以上のものにしようと「磨き込む」ことを続けてきました。

特に意識したのは、探究をする生徒たち自身にブラッシュアップしてもらうことです。
我々と一緒に探究活動の運営をしたい生徒を毎年募集し、意見をもらって反映してきました。3年生になった生徒が、新2年生の探究の相談にのる体制も整えました。生徒たちは自走するようになり、今では協力を仰ぎたい外部の方も自分たちで見つけてきます(田所先生)

私はコーディネーターとして4年前から外部調整などに関わってきました。心がけているのは、お互いがWin-Winとなるように関係性を磨いていくことです。例えば成果発表会に招待するときは、生徒と直接対話できる時間となるべく作ります。生徒の学びが深まり、外部の方からすれば「自分たちの業界に生徒が興味をもつきっかけ」の場にもなるからです。生徒たちには、いろいろな生き方をする大人と出会い、こんな世界もあるんだと引き出しを増やしながら、自分にあった将来を見つけていってほしいと願っています(真子氏)

八幡高校(福岡・県立)
進路部キャリア教育課長 田所優果先生/
コーディネーター 真子静佳氏

理数科と文理共創科(2024年度に普通科より改編)がある。教科科目横断型授業や探究活動を推進。文理共創科の『夢現∞プロジェクト』は以下学校HPも参照。<https://yahata.fku.ed.jp/> >文理共創科>夢現∞プロジェクト

「共に創る学び」の 意義とは？

本特集で取材させていただいた取組から、多様な人と協働することの
さまざまな意義が見えてきました。ご自身の学校においても、
協働の意義について改めて考える機会にいただけますと幸いです。

25ページ



島根県益田市

- 益田市のライフキャリア教育の最終目標は「自分の人生を能動的に生きていくことができる力を育む」こと。そのためにはどんな仕事をしたかだけでなく、**どうありたいか、どう生きていきたいか**という、職業人として以外の「**今を生きる**」大人の生き方に**触れることが重要**と考えました。

笛吹高校（山梨・県立）

- 本校はスクール・ミッションに、『主体的に学ぶ力を育て、地域に根ざし、地域に貢献し、地域のリーダーとなる人材を育成すること』を掲げています。その実現には、学校と地域が“面”でつながり合うことが非常に重要です。
- **地域を元気にしたいという思いは共通**です。CS委員の皆さんが元々もつ**地域愛が、生徒に接するなかで一層強まっているように感じます。**



5ページ

8ページ



大阪ビジネスフロンティア高校 （大阪・府立）

- 連携先の方になぜここまで協力的なのかと尋ねると、『高校生と一緒にやるのが楽しいから』とおっしゃるんです。『生徒の笑顔がいいんだ』と。かかる時間、お金、労力といった損得ではないんですね。それは生徒も同じで、アルバイトとは違って**お金が稼げるわけではなくても、楽しいからやると。みんなイキイキしていますし、学校とは違う一面を見せる生徒もいて、**学びの場は学校だけじゃない、教科書では学べないことがあるということ**を身をもって感じています。**

佐用高校（兵庫・県立）

- 大事なのは、自分たちが得た知識・技能がどう役立つか、自分たちが生み出したものが社会にどのように受け止められるか、を知ることです。地域の方々と直接コミュニケーションをとるなかで、商品や接客がどのように受け止められるか、ネガティブな反応も含めてリアルに経験することが、家庭科という教科の学びにおいても重要だと考えています。
- 高校生にとって、自分のアイデアと行動力で地域を少しでも変えたという経験は、とても大事なんじゃないかと思うんです。将来の活躍の場が佐用であろうとなかろうと、高校生に地域に愛着や誇りをもってほしい。



11ページ

15ページ



菊の湯（長野県松本市）

- おやこ菊の湯のエピソードのように、今は《手伝ってもらう側》だけど、次は《手伝う側》にも回れるような関係を意識的につくることで、コミュニティは発展するし、持続可能になると思うんです。
- 応援する側とされる側の関係で終わってはもったいない。その先まで意識して、良い関係を築いていきたいと思っています。

大宜味村観光協会

（沖縄県大宜味村）

- （未熟な言葉でも）口にすることで、相手から反応があるし、自分でも持ち帰って勉強するじゃないですか。そうやって学び、考えを深めるなかで次第に、未熟だった言葉が、自分自身の本当の言葉に変わっていく気がするんです。すると、幸運なのか必然なのかはわかりませんが、関連する人を紹介されたり、貴重な情報を頂いたり、どこからともなく解決の糸口が訪れる。最初に意味を深く考えることも大切かもしれませんが、それで言葉や行動が止まってしまってはもったいない。意味はあとから育つものだと思っています。



20ページ

■あなたの学校にとって、学校外の人と協働して学びを創ることにどのような意義があるでしょうか？

その一歩から、 学びや意味へと 続いていく

今号では、「社会と共に創る学びの現在地」をお届けしました。学校外との連携や協働と聞くと、周到な準備や明確なゴール設定がなければと、つい身構えてしまう先生もいらっしゃるかもしれません。しかし取材を通して見えてきたのは、多くの素晴らしい実践が、実は手探りの小さな一歩から始まっているということでした。

例えば、誰かに「こんなことを考えている」と話してみる。すると、思わぬ協力者が現れたり、面白いアイデアに発展したりする。初めは曖昧な言葉でも、対話を重ねる中で考えが深まり、やがて「自分自身の本当の言葉」へと育っていくと語る実践者もいました。

また、関係者全員が同じ一つの目的を意図して共有する必要はないのかもしれませんが、参加者それぞれの多様な動機や期待を尊重し、互いに助け合う関係性そのものが、答えのない問いに共に挑む力になります。どちらかが一方的に「支援する／される」という関係ではなく、関わる人たちの「楽しい」「ワクワクする」という気持ちが原動力となり、学校と地域が互いにメリットを享受できる関係が自然と築かれていく中で、活動は持続可能なものになっていくのだと感じました。

社会と共に創る学びは、時に調整が大変で、面倒な道のりに感じられるかもしれませんが、決して一人で全てを背負う必要はありません。まずは肩の力を抜き、校内外のさまざまな人を頼りながら、共に創るプロセスそのものを楽しんでみるのはいかがでしょうか。本特集が、その新たな一歩を踏み出すささやかなきっかけとなれば幸いです。